

「あっちゃんの笑顔」

加賀市立錦城中学校 1年

西野 可南子（にしの かなこ）

私を含め、今の子どもたちはとても幸せだと思います。好きなものを食べて、好きな洋服を着て、学校へ行き、授業を聴き、スポーツをします。

平気で「死ね」とか「うざい」とかを連発し、どうでもいいような事で人の悪口を言ったり親に反抗します。何の目的、目標もないまま怠けて日々を送ることもあります。

自分が五体満足で、どんなに恵まれた環境にいるのかさえ気づかない人が大勢いると思います。

私の十七才の兄は障害者です。ふつうの赤ちゃんはお母さんのお腹の中で四十週を過ごすのに、兄は三十一週で産まれました。たった七七八グラム赤ちゃんは片手の上に乗るひな鳥の様だったとお母さんが言っていました。身体中にチューブを通され、それでも一生懸命息をして生きようと頑張っている赤ちゃんを見て、母は毎日泣いていたそうです。心の中で「頑張って！生きて！」と叫んでいたそうです。

私たちが今、当たり前のようにしていることも兄は全くできません。食べることも、洋服を着替えることも、お風呂に入ることさえ全部、誰かに介助してもらわないと生きていけません。

でも、いつもニコニコ笑っています。絵本を真剣に見ます。歌をうたってあげると身体を上下左右に動かしてリズムをとります。

「あっちゃん」って呼びかけると、振り向きニコッと笑います。この笑顔にみんながいやされます。

現実には、兄のような人たちのお世話はとても大変です。食事の時には、すぐにこぼすので、ていねいに食べさせてあげないといけません。車いすの乗りおりも、歩けないので私と母が手伝います。二人で持ち上げるのはとても重いです。

でも、生きている以上、私たちと同じ楽しみや喜びを味わってほしいと思います。実際兄は楽しい人生を送っているのかな？と、ときどき思うこともあります。しかし兄の笑顔はとても幸せそうです。ですから、私もその笑顔を見るたびに、とても幸せな気持ちでいっぱいになります。

兄の通っている学校の先生方、病院の看護婦さん、兄と接してくれている回りの人たちは、みんな兄に優しくことばをかけ、遊んでくれて、そして抱きしめてくれます。みんな兄のことを大切に思ってくれています。

兄は回りの人の愛情を身体でたくさん感じています。だから笑顔でそれに答えているのです。

「あっちゃんは幸せ者だね。」と母が言いました。私も、本当にそう思います。回りの人に恵まれて、可愛がられて、それを感じる事が出来ているからです。それだけでも生きている価値や生きていく意味があります。このことから、私は兄を含め、他の障害者の方たちのことを、「かわいそう」という目で見ないでほしいのです。「かわいそう」と思うことが、その人にとって一番「かわいそう」です。同情ではなくふつうに、他の子と一緒にように接してあげてください。

そして私たちも、こんな兄に教えられることがいっぱいあると思います。兄がいるお陰で私たちも幸せに暮らせるのです。

あっちゃんがいなかったら、もしくは障害者じゃなかったら…。私も、他の障害者の親などを見て「大変だなあ」と簡単に思うだけだったかもしれません。しかし、兄を通して同情という見方ではなく、その人の姿を素直に受けとめることもできるし、その人の幸せを感じることもできるようになりました。

私たちは恵まれすぎています。だけど、兄がいなかったらこんなこと考えもしなかったと思います。

今、こうして何不自由なく生きていられる事をありがたく思っています。大げさかもしれないけど、産まれてきたことに感謝します。私は、どんな人であれ、産まれてきて意味のない命はないと思います。

障害のある人もない人も、生きていることのありがたみや、一つ一つの命の大切さを感じられるようになってほしいです。十年後二十年後も、あっちゃんが笑顔で、多くの人たちと関わっていけるような世の中を作っていけるよう、働きかけていきたいです。